



日本人が日本人に刃向かえるか。君の行為は、国賊、売国奴のやることであるとはおもわないか。このような疑問を解決し、答えないかぎり、人々は納得できないのかもしれない。

…じぶんを、軍部にかりだされた戦争の被害者であるといわれると、そうではない、国のために勇んでやってきたのだ、と叫びださずにはおれない…

…同志などの言動からわたしがうけた感化について語れたらよいと思った。しかし…日常的な、二、三、のことがらから思想変化について語るほうが実際にあっていると考え。*1

日本の政府が、金東希氏の亡命問題を一見さりげなく「単純密入国」として処理しようとしているのは、これをまともに「亡命」問題としてはとり扱わない方が、今は独占資本に有利だから……国民の共犯関係の意識が日常性の次元で実体化され、やがて制度化されるまでこのままでいった方がいい。*2

- テキスト 秋山良照「西瓜と焼餅」*1 中小路静夫「延安の生活」(『反戦兵士物語』1963年 所収)
林功三「金東希とわれわれ」*2 (『res novare』1967年 所収)

日時 **7月26日** 場所 **葛飾区立堀切地区センター別館 牡丹の間**
(日曜)午後1時15分～5時 京成本線「堀切菖蒲園」駅徒歩 約10分、葛飾区堀切2-31-10

13:15～15:15 報告(キム・ヨンイル)と討議
秋山良照「西瓜と焼餅」 中小路静夫「延安の生活」
反戦同盟記録編集委員会編『反戦兵士物語』1963 所収
15:30～16:45 報告(前田年昭)と討議
林功三「金東希とわれわれ」『res novare』1967 所収



参加費 ひとり**500円**(要予約)

主催(予約) 前田年昭 メール tmaeda1966516@gmail.com
電話 080-5075-6869

- 参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。
 - 今回のテキストは入手にくいものですので、ご連絡ください。
- 事前に対象テキストを読み、当日もテキスト持参のうえでご参加ください。

現在、読書会では『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』を読んでいる途中だが、今回は日朝中人民連帯の歴史についてより具体的な出来事をめぐり、討議したい。

今回、『反戦兵士物語』をとりあげたのは、『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』を読むなかで、日中戦争における日本軍捕虜による反戦兵士運動を知り、日本帝国主義を共通の敵として「祖国」を「裏切った」日本人民がいたことに強い関心を抱いたからだ。それは、日本人民を加害者としてだけ位置付け続けることの違和感からきている。加害者性を民族の本質かのように扱うことは、逆説的に自己変革を遠ざける言い訳である。一銭五厘で動員される被

害者性を引き受けて、はじめて手を握ることができるのではないか。それが、ひとすじの糸のように細々としていたとしても。はたして、皇軍兵士は生まれ変わることができたのか、ともに考えたい。

(キム・ヨンイル)

金東希は、1965年ベトナム派兵を拒否して韓国軍を脱走し、日本へ亡命を求めた元韓国軍兵士である。ベトナム人民を殺したくないと「憲法9条の日本」をめざした。日本の平和なき「平和主義」を暴露した当時のベ平連などによる金東希支援運動の歴史から、私たちは何を学ぶことができるのか。日韓闘争につづく入管闘争の歩みを振り返る。(前田年昭)

『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

(編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ)

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で読めます。QRコードは⇒
264話全訳データは <https://fire.st/h6yq1ut> にあります。



同じ二つの歌を今と未来に歌うため

須田光照

『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』第二講の後半を報告した。時代は一九三〇年代から日帝敗戦（朝鮮・中国の勝利）まで。日帝の侵略の嵐が吹き荒れていたときにも

れ日本人が自らを解放したいと求めるなら現在の朝・中国人民にどのような姿勢と態度で向き合うべきか。「同じ一つの歌を歌う」ことを目標にして議論していきたい。

報告を終えての補足

「差別」と「階級」とについて

岡崎耕史

前回報告の中で、最も強調したかったのは、階級と差別についてです。長い間、障害者の介護や支援の職場に携わり、人助け感情や障害者運動について、一福祉労働者として、同僚などと考えることが多いからです。

しかし三国人民をけつして並列で均等なものとして描いていないところが本書の核心ではないか。自己解放をめざす日本人が朝・中国人民の闘いから「触発され刺激され鼓舞され」また「保育され支援され激励され」ていた関係だったと記す。帝国主義本国の階級闘争は被抑圧民族の闘争と結合しなければならぬという結論。

歴史を学ぶ意味は今と未来を変えるためにある。現在進行形で朝・中国人民を支配階級とともに抑圧しているわれわ

報告をきいて

片隅の小さなこと

赤羽 健

2013・10・1（発行）中の「革命が反革命・侵略の回路を辿って国内に逆流する」という一文だ。侵略戦争・植民地統治のために帝国主義が敷き詰める道路・港湾・橋、ダム・鉱山・工場、通信・通貨・言語などを伝って波及するというイメージです。こんなことを考え、最近、特性と属性をしつかり区別することは大切だと改めて思いま

す。人や集団には様々な歴史性と特性があるが、それを材料に社会的な属性をレッテルとして貼り付けて差別する。差別を受けた傷痕に階級支配の痕跡がその動かぬ証拠として残されているに違いない。属性の生産・再生産とは、資本主義的搾取のための階級差別の装置として機能しているのではないだろうか。

人びとの歴史を指すのだと思う。エレナ・コスチュチェンコ『私の愛するロシア（Моя любимая страна）』（高柳聡子訳、エトセトラブックス）が昨年刊行された。страна（ス

「それぞれの『主体性』」というものが確立され、そのことによつてはじめて連帯が生まれ、共通の場が発見され、それぞれの立場から真理に近づいてゆく」（106頁）。連帯の条件として第一に「主体性」の確立が必要だという視点に強く共感した。そのために「自分たちの社会の中にある排外主義、植民地主義、民族的優越感と闘う」（岡崎耕史）。そして被害・加害の双方が「自分たちの歴史を取り戻す」（須田光照）。また同

田洋『国境・国家・大東亜革命——Kさんへの手紙・続』（共産主義運動年誌）第14号、

の上に生きる日本人としての「非対称性」を確認する場面が度々あった。「権力犯罪と民衆犯罪の区別」という指摘も出、山辺健太郎によるただし書きもあり、けれど第二講を読み私は、朝鮮人虐殺と治安維持法とを「同じこと」と感じ取れない感性、「肩を並べる」ことを後ろめたいと感じる消極性を、叩かねばならないと思った。

1923年のメーデーで、植民地解放が決議され、「日朝労働者団結せよ」のスローガンが叫ばれたこと、小林多喜

『日・朝・中という視野』の重要性を再認識

前田年昭

第二講「四」で、二つの歴史観があり、さらに人民の側にも立場の違いがあると学んだ。これはまた梶村秀樹の「自分の存在規定性」、「日本人が他民族を抑圧する状況に自らを置いている中で固有の否定すべきものをもっている。それをどう始末するかという独自の課題」（『排外主義克服のための朝鮮史』24頁）という指摘に通ずる。侵略・加害の歴史を自分のものにする

と、抵抗・連帯の歴史を引き継ぐことは一体である。連帯を希求するなかでの、

肩を並べて闘うことは、支配せられる階級の矜持

田代ゆき

報告と議論の中で、植民地下の中朝民衆と、彼らの犠牲

二虐殺が上海極東反戦大会の準備のただ中に行われた事実を知らなかった。これら、中朝日人民の連帯の歴史との隔たりもまた植民地蔑視に等しく、日帝の歴史観の内面化にほかならない。

過去の闘いは、次の闘いの中に呼び戻されて歴史となる。日帝に抗おうとした日本人民の歴史を、失敗や欠陥を含め自分のものとすることは、加害の歴史を自分のものとすると同じ重さで、いま私たちの闘いに必要な努力だと思ふ。

日本側による「ひきまわしと利用主義」批判の強調は、朝鮮人運動を「利用される側」に前提した蔑視ではなかったか。梶村の提起した「自発的内発性」の立場から考え直す必要がある。

本書133頁年表は類書にないものであり、「日本人民の立場からすれば、どうしても、日・朝・中という視野が最小限必要」との指摘（107頁）に強く頷かされた。

